

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）分担総合研究報告書

男性不妊治療のあり方に関する研究

研究協力者 太田 昌一郎 富山医科薬科大学附属病院泌尿器科助手

研究要旨 平成 10 年度は男性不妊症の当院における診療の実態を調査したうえで男性不妊症の病因、検査、治療法について研究班で検討のうえ用意した項目を集計し、平成 11 年度は研究協力者間で担当する病因を振り分けたうえで、研究協力者の所属する施設のそれぞれの病因別で検査、治療法などについて検討したが、当施設は、男性性機能障害のため、正常な性交が行えず、子供に恵まれない患者に対して行われている治療および効果を把握し、今後の治療法を検討するために研究協力施設への書面での調査を行った。特発性造精機能障害をのぞく原因としてもっとも割合の高かったものは精索静脈瘤であるが、当科ではこの診断にカラードブラを応用している。触診所見よりもカラードブラでの内精静脈の逆流速度の方が予後をよく反映することが判明している。今後は治療面にも最新の技術を応用していきたい。男子不妊症の原因としての勃起障害の検討において、今回の集計はシルデナフィル発売以前の集計であり治療法はまちまちであったが、今後はシルデナフィル使用例が大半となるであろう。また、その効果が期待される。さらに、勃起障害におけるカウンセリングの重要性が再認識された

A. 研究目的

生殖補助医療の技術の発展とともに、不妊治療は近年顕著な進歩を遂げた。しかしながら男性に原因があると考えられる不妊症の実態は明らかではなく、どのような患者に対してどのような適応で治療が行われているか、また、その治療効果については全国的な調査等は未だに行われずことがない。不妊治療は昨今の社会的問題として重要な課題となってきた。男性不妊の実態および治療等に関する研究では、わが国における男性不妊症の実数、病因、治療内容、妊娠率を調査する。

B. 研究方法

平成 10 年度は男性不妊症の当院における診療の実態を調査したうえで男性不妊症の病因、検査、治療法について研究班で検討のうえ用意した項目を集計した。平成 11 年度は研究協力者間で担当する病因を振り分けたうえで、研究協力者の所属する施設のそれぞれの病因別で検査、治療法などについて検討した。われわれは、男性性機能障害のため、正常な性交が行えず、子供に恵まれない患者に対して行われている治療および効果を把握し、今後の治療法を検討す

るために研究協力施設への書面での調査を行った。

C. 研究結果

まず、当院における診療の実態であるが 1997 年に当科を受診した男性不妊症新患数は 56 名であり、これは全新患数の 6.4%、男性新患数の 9.4%であった。これらの男性不妊患者のうち、24 例は直接来院した症例で次いで他院の婦人科からの紹介が 17 例、他院の泌尿器科からの紹介が 8 例、そして当院の婦人科からの紹介が 7 例であった。

次に、当院における男性不妊症の病因、検査、治療法の検討結果であるが、まず、病因である。不妊の原因は大半が精巣因子であり、そのうち、特発性が 27 例と最も多数を占めた。次いで、精索静脈瘤が 26 例であった。低ゴナドトロピン性の乏精子症も 1 例認められた。あと、性機能因子として射精障害が 2 例認められ、これらはいずれも糖尿病に合併したものであった。なお、今年も精路因子が原因であると考えられる症例は認められなかった。検査は当科においては、男性不妊患者に対して、一般精液検査のほかには内分泌検査、精子機能検査および Cell Soft3000 を用いた精子運動能検査などを施行しているが今回は精子凝集反応を含む一般精液検査結果の

み検討した。結果はWHOの基準で判定した。精液検査は56例中52例に施行した。精液量が正常(2.0ml以上)であったものは31例、精子数が正常(2000万/ml以上)であったものは29例、また、無精子症は9例に認められた。精子運動率が正常(50%以上)であったものは19例で精子正常形態が正常(30%以上)であったものは27例であった。最後に治療であるが、精巣因子の例については治療は薬物と手術に大別され、薬物療法では漢方の補中益気湯を処方した例が10例であった。手術法では精索静脈瘤に対して、当科では腹腔鏡下の内精静脈高位結紮術を施行しており、15例に施行した。射精障害の2例についてはトフラニールを投与し、そのうち1例では膀胱内精子の回収を施行した。検討した患者数は85例で夫の平均年齢は38.1歳で勃起障害の平均期間は28.9カ月であった。85例のうち57例に治療が行われ、27例で薬物の投与が施行され、16例で勃起障害に対して効果をもとめ、1例では妊娠をもとめた。PGE1や抗うつ薬が使用されていた。陰圧勃起補助具が16例に使用され12例で同様の効果をもとめ、1例では妊娠ももとめた。陰茎弯曲症が原因の5例について陰茎形成術が施行され、いずれも効果をもとめたが、妊娠には至らなかった。静脈手術は4例に施行され、1例に効果をもとめたが、妊娠例はなかった。他には陰茎絞扼リングが4例に使用されているが、2例の勃起障害に対する効果のみであった。1例で精神科による家庭療法が施行され勃起障害に対しては効果をもとめた。一方、28例はカウンセリングのみであったが、6例は勃起障害が改善し、1例で妊娠をもとめた。

D. 考察および結論

当科では1979年の開院以来、男性不妊症の専門外来を開設し、患者の治療にあたってきた。その間地域住民に浸透したためか、直接来院の割合がもっとも高かった。今後は当院産婦人科との連携をさらに強めて、患者のニーズに答えていきたい。

特発性造精機能障害をのぞく原因としてもっとも割合の高かったものは精索静脈瘤であるが、当科ではこの診断にカラードプラを応用している。触診所見よりもカラードプラでの内精静脈の逆流速度の方が予後をよく反映することが判明している。今後は治療面にも最新の技術を応用していきたい。男子不妊

症の原因としての勃起障害の検討において、今回の集計はシルデナフィル発売以前の集計であり治療法はまちまちであったが、今後はシルデナフィル使用例が大半となるであろう。また、その効果が期待される。さらに、勃起障害におけるカウンセリングの重要性が再認識された。